

# 確率

## 数学と医療・第2回

---

数学・橋本貴宏

2024年9月11日 1限

**本講義資料の無断使用・無断転載・SNS等への投稿を固く禁じます**

# 本日の授業では

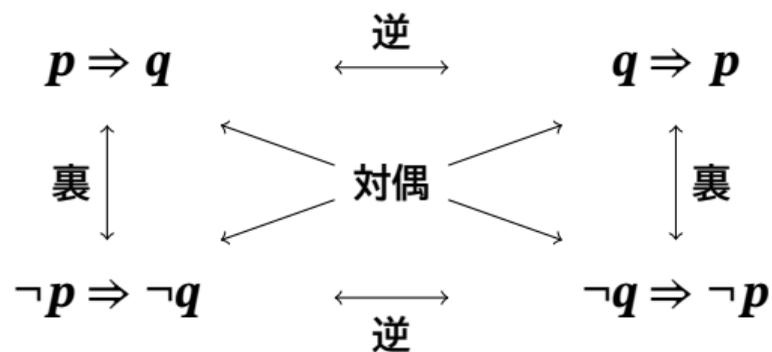
- 前回のおさらい
  - (1) 命題と論理
  - (2) 証明の方法
- 確率
  - (1) 確率の定義
  - (2) 条件付き確率
  - (3) ベイズの定理

# 前回のおさらい

## 命題と論理

真 (True) であるか偽 (False) であるかが明確に定まっている文章を**命題**と呼ぶ.

## 逆・裏・対偶



命題とその命題の対偶は同値である.

## 証明の方法

- 背理法 ...  $p$  が偽であると仮定して矛盾が導かれるならば,  $p$  が真であることが示される
- 数学的帰納法 ...  $P(1)$  が真であり, かつすべての自然数に対して,  $P(k)$  が正しいとき,  $P(k+1)$  が真である  $\Rightarrow P(n)$  が, すべての自然数  $n$  に対して真である

(注意: 推論の方法) 「帰納」と「演繹」

帰納法: いくつかの事例から一般法則を導く

演繹法: 正しい前提から正しく結論を導く

Q 数学的帰納法は帰納法か?

A 演繹法である

## 前回の課題 (その1)

[1] ド・モルガンの法則  $\neg(p \wedge q) \equiv (\neg p) \vee (\neg q)$  を示せ.

解 真理値表は次のようになる

$p$	$q$	$p \wedge q$	$\neg p$	$\neg q$	$\neg(p \wedge q)$	$(\neg p) \vee (\neg q)$
$T$	$T$	$T$	$F$	$F$	$F$	$F$
$T$	$F$	$F$	$F$	$T$	$T$	$T$
$F$	$T$	$F$	$T$	$F$	$T$	$T$
$F$	$F$	$F$	$T$	$T$	$T$	$T$

よって  $\neg(p \wedge q) \equiv (\neg p) \vee (\neg q)$  が示された.

## 前回の課題 (その2)

[2]  $\tan 1^\circ$  が無理数であることを示せ。

解 「 $\tan 1^\circ$  は有理数である」として矛盾を導こう. 2倍角の公式より

$$\tan 2^\circ = \frac{2 \tan 1^\circ}{1 - \tan^2 1^\circ}$$

有理数の有理式なので  $\tan 2^\circ$  は有理数. 2倍角の公式を適用していくと,  $\tan 4^\circ$ ,  $\tan 8^\circ$ ,  $\tan 16^\circ$ ,  $\tan 32^\circ$ ,  $\tan 64^\circ$  も有理数となる. 加法定理より

$$\tan 60^\circ = \tan(64^\circ - 4^\circ) = \frac{\tan 64^\circ - \tan 4^\circ}{1 + \tan 64^\circ \cdot \tan 4^\circ}$$

となるがこれは  $\tan 60^\circ = \sqrt{3}$  が有理数となってしまうので矛盾. ゆえに  $\tan 1^\circ$  は無理数である.

## みなさんからのコメント

- 問題が難しかった. 課題の正答率はどう評価されるのですか  
まじめに取り組んだと判断できれば, 間違っているとしても減点はしません
- 数学的帰納法が演繹法であるという点が混乱しそうだった  
数学の証明は「演繹法」によりなされます
- ド・モルガンの法則 (命題版) の ① で「かつ」「または」に対称性が無いのが  
変に思いました  
スライドが間違っていました. 訂正版に差し替えました
- 選言と連言の説明がわかりにくかった  
「～のときに限り」はあまり使わない言葉ですね. 真理値表を使って説明します
- 課題を写真で撮って提出する際に PDF スキャナーを使うべきですか  
その方が見た目が良いので, できるだけアプリを活用してほしいです

## 定義

試行 (trial) ... 同じ条件のもとでくり返すことができる実験や観察

標本空間 (sample space) ... 起こりうることから全ての集合. (全事象ともいう)

事象 (event) ... 起こりうることから

根元事象 (elementary event) ... 起こりうることからのうちの1つ.

空事象 (empty) ...  $\emptyset$ : 何も起こらない

例 サイコロを投げる  $\Rightarrow$  試行.

1の目が出る, 偶数の目が出る  $\Rightarrow$  事象.

標本空間は,  $k$ の目が出るという根元事象を  $\{k\}$  で表すと,

$$\{1, 2, 3, 4, 5, 6\} = U$$

## 標本空間と事象 (その2)

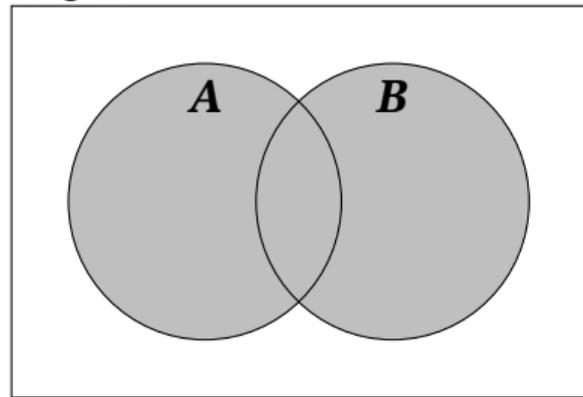
事象  $A$  は標本空間  $U$  の部分集合:  $A \subset U$ . 以下集合の記号を使って書く.

定義

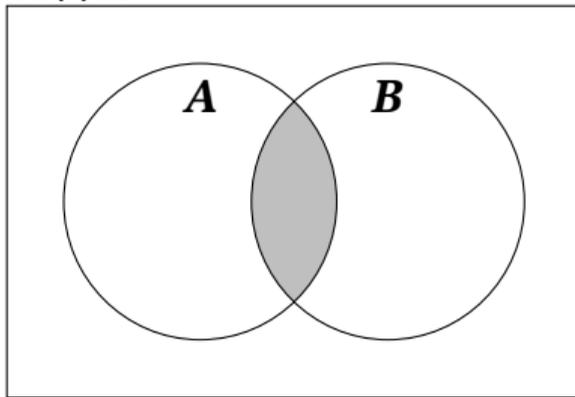
和事象 (union)  $\cdots A \cup B$

積事象 (intersection)  $\cdots A \cap B$

$A \cup B$



$A \cap B$



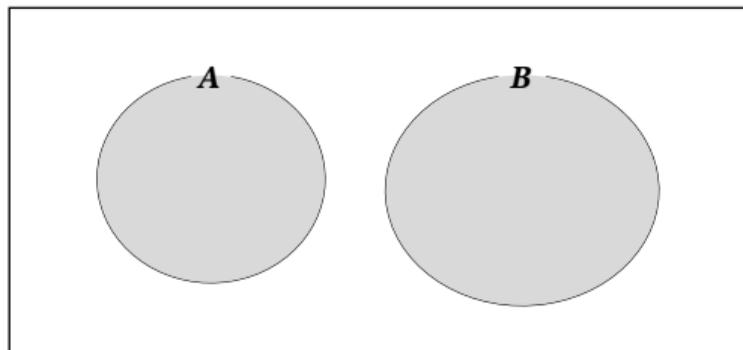
## 標本空間と事象 (その3)

余事象 (complementary) ...  $\bar{A}$ :  $A$  が起こらない, ( $A^c$  とも書く)

• 排反事象 (disjoint)

事象  $A$  と事象  $B$  は同時に起こることはない.

例 サイコロを投げて,  $A$ : 偶数の目が出る,  $B$ : 奇数の目が出る. 集合の記号でかくと,  $A \cap B = \emptyset$ .



サイコロを投げて、1が出る可能性はどのくらいであろうか。確率 (probability) とは起こりやすさのことである。1が出る事象を  $A$  とかくとき、その確率を  $P(A)$  で表す。

### 数学的確率

もしサイコロに鉛がこめられているような「いかさま」がなければ、どの目ができることもすべて同程度に確からしいと考えられる。よってこの場合は、1から6までのすべての目に対して、その目が出る確率は  $\frac{1}{6}$  である。これを**数学的確率**といい、

$$P(A) = \frac{n(A)}{n(U)} = \frac{1}{6}$$

として定義する。  $n(A)$ : the number of  $A$

## 確率の定義 (その2)

### 統計的確率 (経験的確率)

一つのサイコロを何回も投げ、1の目が出る回数を調べてみた。  $n$  回サイコロを投げて、  $r$  回1の目がでるとき、割合  $\frac{r}{n}$  (統計の言葉では**相対度数**という) は  $n \rightarrow \infty$  のとき一定の値 ( $= \frac{1}{6}$ ) に近づいていく。これを**統計的確率**という。

- 「同様に確からしい (equally likely)」ならば**数学的確率**で良い。場合の数の公式を使って計算すれば良い。降水確率などの現実的なものについては**統計的確率**を求めることになる。

# 確率の性質 (その1)

## 確率の公理 (axiom)

標本空間を  $U$  とする. 事象  $A, B$  に対する確率は, 次の性質をみたす. (次をみたすものを確率と定義する)

$$(I) \quad \mathbf{0 \leq P(A) \leq 1}$$

$$(II) \quad \mathbf{P(U) = 1, P(\emptyset) = 0}$$

$$(III) \quad \mathbf{A \cap B = \emptyset \Rightarrow P(A \cup B) = P(A) + P(B)}$$

いくつかの性質を述べる.

$$(1) \quad \mathbf{\text{余事象} \quad P(A) + P(\bar{A}) = 1}$$

$$(2) \quad \mathbf{\text{和事象の確率 (加法定理)} \quad P(A \cup B) = P(A) + P(B) - P(A \cap B)}$$

## 確率の性質 (その2)

(証) (1)  $U = A \cup \bar{A}$  で  $A \cap \bar{A} = \emptyset$  より,  $1 = P(A) + P(\bar{A})$ .

(2)  $A \cup B = (A \cap B) \cup (A \cap \bar{B}) \cup (\bar{A} \cap B)$  と分解できる. 互いに排反なので, 公理 (III) より

$$P(A \cup B) = P(A \cap B) + P(A \cap \bar{B}) + P(\bar{A} \cap B).$$

さらに

$$P(A) = P(A \cap B) + P(A \cap \bar{B}),$$

$$P(B) = P(A \cap B) + P(\bar{A} \cap B)$$

となるから

$$\begin{aligned} P(A) + P(B) - P(A \cap B) &= P(A \cap B) + P(A \cap \bar{B}) + P(\bar{A} \cap B) \\ &= P(A \cup B). \end{aligned}$$

$P(A) \neq 0$  とする.  $A$  が起こったという条件のもとで,  $B$  の起こる事象を  $B|A$  と書く. このとき,  $A$  が起こったときの  $B$  の起こる条件付確率を

$$P(B|A) = \frac{P(A \cap B)}{P(A)}$$

で定義する.

積事象の確率 (乗法定理)

$$P(A \cap B) = P(A)P(B|A) = P(B)P(A|B)$$

$P(A \cap B) = P(B \cap A)$  により示せる.

## 条件付き確率 (その2)

**例題 1** ある野球チームの試合において, A 投手が先発する確率は **20%**, A 投手が先発したときにチームが勝つ確率は **70%** であるという. また, A 投手以外の投手が先発したときにチームが勝つ確率は **45%** であるという. 次の問いに答えよ.

- (1) A 投手が先発してチームが勝つ確率を求めよ.
- (2) チームが勝つ確率を求めよ.
- (3) チームが勝ったことがわかったとき, 先発が A 投手である確率を求めよ.

**解** A: A 投手が先発する,

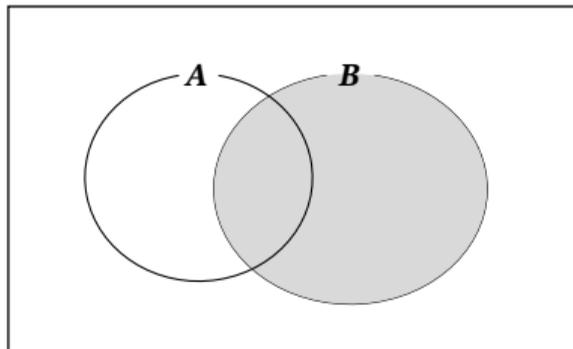
B: チームが勝つ, と2つの事象を定義する

$$P(A) = \frac{1}{5}, P(B|A) = \frac{7}{10}, P(B|\bar{A}) = \frac{9}{20} \quad \text{であるから,}$$

## 条件付き確率 (その3)

$$(1) P(A \cap B) = P(A)P(B|A) = \frac{1}{5} \cdot \frac{7}{10} = \frac{7}{50}.$$

(2)  $B = (A \cap B) \cup (\bar{A} \cap B)$  と分解する. さらに,  $(A \cap B) \cap (\bar{A} \cap B) = \emptyset$  であるから



$$\begin{aligned} P(B) &= P(A \cap B) + P(\bar{A} \cap B) = P(A \cap B) + P(\bar{A})P(B|\bar{A}) \\ &= \frac{7}{50} + \frac{4}{5} \cdot \frac{45}{100} = \frac{7}{50} + \frac{18}{50} = \frac{1}{2} \end{aligned}$$

(3) 条件付き確率の定義より

$$P(A|B) = \frac{P(A \cap B)}{P(B)} = \frac{7}{50} \cdot \frac{2}{1} = \frac{7}{25}.$$

## ベイズの定理 (その1)

例題 1 の考え方より, 次のことが導かれる.

$P(B|A)$ :  $A$  が起こったときの  $B$  の起こる条件付確率

$A$  が「原因」で  $B$  が「結果」である.  $P(B|A)$  は, 「原因」のもとでの「結果」の確率である. これに対して「結果」が出たときの「原因」の確率  $P(A|B)$  を求める公式を導いてみよう.

$P(B|\bar{A})$  は「 $A$  が起こらなかったときの  $B$  の起こる条件付確率」である. そして, 乗法公式より

$$P(A \cap B) = P(A)P(B|A), \quad P(\bar{A} \cap B) = P(\bar{A})P(B|\bar{A}).$$

ここで,

## ベイズの定理 (その2)

$$(A \cap B) \cap (\bar{A} \cap B) = \emptyset, \quad (A \cap B) \cup (\bar{A} \cap B) = B$$

であるから,

$$\begin{aligned} P(B) &= P((A \cap B) \cup (\bar{A} \cap B)) = P(A \cap B) + P(\bar{A} \cap B) \\ &= P(A)P(B|A) + P(\bar{A})P(B|\bar{A}) \end{aligned}$$

ここで  $P(B) > 0$  として, 条件付確率の式を  $P(A|B) = \frac{P(B \cap A)}{P(B)}$  と使うことにより,

$$P(A|B) = \frac{P(A)P(B|A)}{P(A)P(B|A) + P(\bar{A})P(B|\bar{A})},$$

## ベイズの定理 (その3)

つまり、条件付確率と、

$P(A)$ : **事前確率** (検査前確率: 結果  $B$  が既知でない場合の  $A$  の起こる確率) より、

$P(A|B)$ : **事後確率** (検査後確率: 結果  $B$  を知った上での  $A$  の起こる確率) を導くことができた。

(注)  $r$  個の場合に拡張することができる。  $A_k$  ( $1 \leq i \leq r$ ) は排反で、

$\bigcup_{i=1}^r A_i = U$  とする。このとき、 $P(B) > 0$  ならば

$$P(A_k|B) = \frac{P(A_k)P(B|A_k)}{\sum_{i=1}^r P(A_i)P(B|A_i)} \quad (k = 1, 2, \dots, r).$$

ある都市では、住民の **0.5%** がウイルス X に感染している。このウイルス X に関する PCR 検査では偽陰性が **0.1%** ほど起きる。また、偽陽性は **3%** ほど起きる。この都市の住民 1 人を無作為に選ぶとき、その住民がウイルス X に感染している事象を A, その住民が PCR 検査で陽性と診断される事象を B とする。

## 偽陰性と偽陽性

ある疾患の診断のための定性テスト (陽性, 陰性で結果を示す検査など) を行った結果は次の表 ( **2×2** 分割表という) によって表すことができる。

	疾患あり	疾患なし
陽性	<b>a</b>	<b>b</b>
陰性	<b>c</b>	<b>d</b>

**a**: 真陽性 (TP)    **b**: 偽陽性 (FP)

**c**: 偽陰性 (FN)    **d**: 真陰性 (TN)

偽陰性率:  $\frac{c}{a+c}$  (疾患ありなのに陰性),    偽陽性率:  $\frac{b}{b+d}$  (疾患なしなのに陽性) 21/29

## バイズの定理の適用例 (つづき)

(1)  $P(A)$ ,  $P(\bar{A})$  を求めよ.

$$P(A) = 0.005 \text{ (感染率)}, P(\bar{A}) = 1 - P(A) = 0.995,$$

(2)  $P(B|A)$ ,  $P(B|\bar{A})$  を求めよ.

$$P(B|A) = \frac{P(A \cap B)}{P(A)} = \frac{a}{a + c} = 1 - 0.001 = 0.999, P(B|\bar{A}) = \text{(偽陽性率)} = 0.03.$$

(3) 検査で陽性と診断された人が、ウイルス X に感染している確率を求めよ.

求める確率は  $P(A|B)$  であるから、バイズの定理より

$$P(A|B) = \frac{P(A)P(B|A)}{P(A)P(B|A) + P(\bar{A})P(B|\bar{A})} = \frac{0.005 \cdot 0.999}{0.005 \cdot 0.999 + 0.995 \cdot 0.03} \doteq 0.143.$$

$P(B|A) = P(B)$  ... (条件付けても付けなくても変わらない)

のとき,  $A$  と  $B$  は独立. そうでない場合は,  $A$  と  $B$  は従属という. 乗法定理より,

$$A \text{ と } B \text{ が独立} \iff P(A \cap B) = P(A)P(B)$$

(この表現にしておくとして,  $P(A) \neq 0$  の仮定がいらぬ)

(注) 一般の場合.  $r$  個の事象  $A_1, A_2, \dots, A_r$  について, それらの任意個の異なる事象のどのような組合せに対しても

$$P(A_i \cap A_j \cap \dots \cap A_k) = P(A_i)P(A_j) \dots P(A_k)$$

が成り立つとき事象  $A_1, A_2, \dots, A_r$  は互いに独立であるという.

## 事象の独立 (その2)

**例題 2** ある大学病院で、**100** 人に対してインフルエンザの予防接種についてアンケートを行った。アンケートは全員回答しており、予防接種を受けた人は **80** 人で受けなかった人は **20** 人であった。**100** 人のうち、インフルエンザに罹った人は **15** 人いた。予防接種を受ける・受けないという事象とインフルエンザに罹る・罹らないという事象が独立であるとき、予防接種を受けてもインフルエンザに罹る確率を求めよ。

**解**  $A$ : 予防接種を受ける,  $B$ : インフルエンザに罹る, と事象を定義する。

	$B$	$\bar{B}$	計
$A$	12	68	80
$\bar{A}$	3	17	20
計	15	85	100

$$P(A \cap B) = P(A)P(B) = \frac{80}{100} \cdot \frac{15}{100} = \frac{12}{100}.$$

このことを  $2 \times 2$  分割表で表す。

独立  $\iff$  列の比, 行の比が等しい

## 2×2 分割表でよく出る用語

	$A_1$ (疾患あり)	$A_0$ (疾患なし)
$B_1$ (陽性)	真陽性 (TP)	偽陽性 (FP)
$B_0$ (陰性)	偽陰性 (FN)	真陰性 (TN)

感度:  $P(B_1|A_1)$  疾患を有する人のうち, 検査結果が陽性である割合

特異度:  $P(B_0|A_0)$  疾患を有しない人のうち, 検査結果が陰性である割合

陽性的中率:  $P(A_1|B_1)$  検査結果が陽性である人のうち, 疾患を有する割合

陰性的中率:  $P(A_0|B_0)$  検査結果が陰性である人のうち, 疾患を有しない割合

陽性尤度比:  $\frac{P(B_1|A_1)}{P(B_1|A_0)}$  感度を, 偽陽性率で割ったもの;  $\frac{\text{感度}}{1 - \text{特異度}}$

陰性尤度比:  $\frac{P(B_0|A_1)}{P(B_0|A_0)}$  偽陰性率を, 特異度で割ったもの;  $\frac{1 - \text{感度}}{\text{特異度}}$

## ベイズの定理

(国試 110-F010 より)

ある疾患に罹患している検査前確率が **0.1%** と推測される患者に、感度 **90%**、特異度 **80%** の検査を行う。検査後確率を計算するための  $2 \times 2$  表を示す。

	罹患有: $A$	罹患無: $\bar{A}$
陽性: $B$	<b>9</b>	<b>1998</b>
陰性: $\bar{B}$	<b>1</b>	<b>7992</b>

検査が陽性だった場合の検査後確率を求めよ。

(解) 感度  $P(B|A) = 0.9$ , 特異度  $P(\bar{B}|\bar{A}) = 0.8$  で  $P(B|\bar{A}) = 0.2$ .  
 $P(A) = 0.001$  であるから

$$P(A|B) = \frac{P(A)P(B|A)}{P(A)P(B|A) + P(\bar{A})P(B|\bar{A})} = \frac{0.001 \cdot 0.9}{0.001 \cdot 0.9 + 0.999 \cdot 0.2} \\ \doteq 0.00448.$$

# まとめ

- 確率の定義

3つの公理を理解する

- 条件付き確率

独立性の概念と合わせて理解する

- ベイズの定理

医療における「診断」と深い関わりがあります。

## 本日の演習問題

### 問題

工場 A と工場 B は、ある同じ医療機器を生産していて、全体のうち 65 % は工場 A で、35 % は工場 B で生産しているとする。工場 A で不良品を生産してしまう確率を 0.8 %、工場 B で不良品を生産してしまう確率を 0.6 % とする。ある製品が不良品だったと報告を受けたとき、その製品が工場 B で生産された確率を求めよ。

## 次回

「確率変数」と「確率分布」をやります。確率と関数が fusion したようなものです。

### 課題提出

AIDLE-K にアクセスし、「0911 課題提出」から提出する。提出期限は **9/14 23:59** とする。フィードバックは今日中に提出。

### 注意

- 「名前を書く」「縦書き」「提出時には確認」
- ファイルサイズを小さく、でも見た目もくっきりと
- **過去の課題で出していないものがある場合は、超過でもかまわないので出すこと**